2018 年度受託研究　「浅野長晟肖像画模写」

―研究内容と模写の工程について―

広島市立大学 芸術学部 美術学科 日本画研究室

監修：荒木亨子（芸術学部准教授）

制作：水越 千紘（2010 年浅野長晟推定再現模写事業 制作参加）

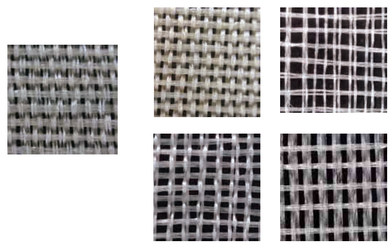
制作協力：広島市文化財団 広島城

2018 年制作　「浅野長晟像肖像画模写」【模写】　水越千紘

平成 31 年の浅野家広島入城 400 年記念事業として依頼を受け、饒津神社に奉納する「浅野長晟肖像画模写」を制作しました。原本は , 広島市文化財団 広島城所有の「浅野長晟 肖像画模写」です。この作品は 2010 年 広島市立大学芸術学部日本画専攻の特定研究として行われた推定再現模写です。原爆で消失した浅野長晟の肖像画（広島市中区超覚寺旧蔵）を再現する目的で行われました。残された資料や同時代の肖像画を参考に人物の調度装束を考証し、筆致や彩色等の描画方法を研究の上制作された作品です。今回広島城にご協力頂き再度 2010 年制作の「浅野長晟肖像画模写」を模本とし、制作研究を行いました。

模写制作の作業工程

本作品は絹本彩色です。基底材である絹は扱いが難しくさらに良質の絵絹が手にはいらないのが現状です。織りや染め、滲み止め、彩色、各工程で試料による検証など材料技法を中心に研究を行いました。模写に使用する絹や絵具は可能な限り原本が描かれた当時のものと近い素材を用います。絵具については、日本画で伝統的に使われてきた天然の岩絵具（鉱物を砕いて粒子状にした絵具）を使用しています。

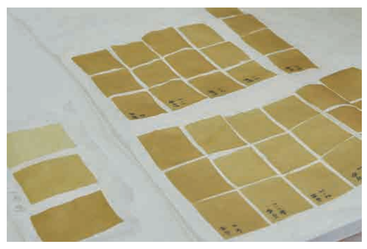


１．絹の調査と選定

昔の絵絹の細めの風合いに近い２丁樋（横糸２本）を使用。いくつかの絹を取り寄せ、織りの間隔や繊維の構造、表面の光沢、使用感など原本に近いものを選択。

２．砧打ち

絹をならし織りを平滑にする目的。棒に綿布と絹を巻き付け固定したものを皮で巻き御影石の上で８時間程度叩く。



３．テストピース作成

目指す絹の色を出す為、矢車を煮出した染色液を作り、その濃度と染めの時間でテストピースを作成。

４．染め

テストピースの結果から濃度と時間を決定し染色。絹を染める事で古色の風合いとなり、さらに背景としての奥行きがうまれる。

５．下げ干し

色むらが生じるため多めに染め、仕上がりの良い部分を選び使用する。

６．絹枠張り込み

染めた絹を木枠に張り込む。枠に張り込むことで表だけでなく裏からも彩色ができる。

７．下図

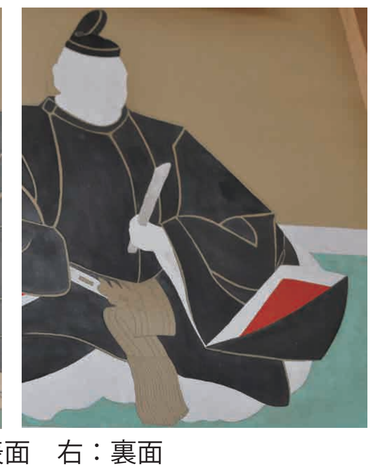
原本をもとに作成の実寸大の下図。絹は縮みが生じ縦糸がより強く収縮。収縮率も考慮し下図を作成する。

８．絹上げ

下図を上げ写したものをパネルに張り込み絹の下に置き、墨で上げ写す。

９．色見本

彩色の見本を作成。
色の重ねなども合わせ検討する。



１０．彩色（裏彩色）　左：表面　右：裏面

絹の裏側から顔や手、装束の部分に胡粉（胡粉は牡蠣殻等を粉砕、精製した絵具）を塗る。岩絵具は天然のものを使用。また白は裏彩色を含め江戸時代に一般的に使用されていた胡粉を選択。（古い時代では鉛白が主流）

【裏彩色】絹の繊維を通し裏から塗られた絵具が表に影響し、発色を変える事で複雑な見え方をする。絹自体の質感、性質を活かした彩色方法で古くから行われた技法である。

１１．裏打ち後　彩色

裏彩色が終わると裏打ちを行う。肌裏（薄美濃紙）と増裏（美栖紙）2 度の裏打ちを行った後、再度表から彩色し仕上げる。
束帯は高貴な色を表現する為、松煙墨（青墨）を使用し具墨（胡粉に墨を混ぜた灰色）にして彩色。青の部分は群青を使用。線と鳥顎飾太刀には金泥を用いる。

１２．完成

彩色完了後、軸装し完成

【絹本彩色】
本画寸法：縦 170cm× 横 51.21cm
表装寸法：縦 212.2cm× 横 71.3cm
表装形式：大和仕立（三段表具）
表装：富岡大雅堂